

岡本 聰 編

近世初期諸家集

下

古典文庫

岡本 聡 編

近世初期諸家集

下

古典文庫

平成八年二月二十日印刷発行 非売品

編者 岡本 聡

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸 舎

近世初期諸家集
下

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座東京〇〇一九〇九一四五九七番

近世初期諸家集
下

目次（下）

三	冷泉為景朝臣歌集	大阪市立大学森文庫蔵本	五
四	幸成朝臣詠草	彰考館蔵本	七
五	黒蜆集	慶応大学付属図書館蔵本	七
六	露底集	慶応大学付属図書館蔵本	一五二
	解説		二五九
	和歌初句索引		二八二

冷泉為景朝臣歌集

冷泉為景

立春

一 くるはるもとの心もこほりぬし野中の清水とけて知るらん

朝霞

二 山の端はかすみもはてす朝つくひにほへるかたを面影にして

谷鶯

三 咲てとく散おもひかは春そとはつけても谷をいつるうくひす

残雪

四 つれなくや外はきえても春の日をふせくむくらか陰のしら雪^ヒ

若菜

五 独すむ妹かすさひやをのつからあるしかきねの若菜なるらん

里梅

六 飛鳥風ふくおり／＼やたをやめの袖のにほひにかへす梅か香

簷梅

七 梅か香もしのふの乱かきりある匂ひを軒の月の下風

春月

八 月はなをかすみの袖につゝみてもかくれぬ物のさたかにはなき

帰雁

九 行雁も心や秋によるとなく花の一へに春を見すてゝ

春曙

一〇 横雲のこゝろほそさも糸による物かは春のあけほのゝやま

春雨

一一 苔の色に日々にそひ行春雨は塵なき庭のちりと見えつゝ

岸柳

三 住吉のきしもせさらん釣人のねたくやなひく青柳の糸

待花

三 まつ花のけ色はかりに明そめて幾日つれなき正の桜戸

初花

四 露とともに紐うちとけてこよひたゝ新枕せむ花の下伏

見花

五 花とやはたゝあさはかに見る人の心にふかくそめむ色かを

花盛

六 半さへほとをさかりのことはりはきのふの花もけふやわすれむ

落花

七 村消の色も木末をあらはるゝ青葉や花の雪の下草

款冬

八 うしとても名にはかくれぬ嶺の花見るほとに世をはわするゝ

池藤

一九 鳩鳥も花にそあそふ池水の玉もの床にかゝる藤浪

暮春

二〇 さかすともなをやたのまん一春はくれてものこる花の日数を

更衣

二一 かへと今朝花の香うとし春をたか中の衣にこよひへたてし

卯花

二二 月もさらに処せきそや卯花のさけるかきねのひかりとはなる

待郭公

二三 徒にあけてかさなる佐夜姫やいつとまつらの山郭公

聞郭公

二四 ほとゝきすその世をかけて橋の上に聞けん人はさそなこひしき

郭公稀

二五 須磨の海士やいかに聞えん郭公声は間とをのころもへにけり

故郷橘

二六 橘の匂ひをとめてふるさとの秋や尾花か袖にしのはん

早苗

二七 うへわたす岡部の早苗一村にとふへき鹿の妻やこもれる

五月雨

二八 池ならぬ池の浮草庭に見て柳の糸もさみたれの比

鵜川

二九 夕附日うつる川瀬もをのか色になるほとまちて鵜舟さす也

叢蚩

三〇 露と散玉とみたれて分行は蚩すくなき野への草村

夏草

三一 くらへても世の人言やはらふかたなつの草のしけきたくひに

夏月

三 明るまで見はてぬ月を短夜のうき名にたへて誰かこつらん

夕立

三 かきくもり夕たつをともあら海のいかれる波や空の村雲

杜蟬

三 染てきく心木葉もなく蟬の声もいろある森の時雨に

夏祓

三 たかために御祓ならねと夏もはやこよひちの輪をこえて行覽

早秋

三 真葛葉のつけぬうらみも心よりやかていりたつ秋の初風

七夕

三 織女もことはのこすな恵わたる千夜を一夜の秋の逢瀬に

荻風

三 吹風によるもまなへとおとろかす萩をそ庭の訓とはきく

萩露

三 朝なく咲そふと見る白露もひるまや萩の花の色なる

女郎花

四 たかすとやふるき尾上の宮人と今もなまめくをみなへしかな

夕虫

四 こぬやとはおもはぬ誰か日晩しのなかぬ夕もまつ虫の声

夜鹿

四 鳴しかの声そまきれぬ山ふかき夜半の枕に独かそへて

初雁

四 みねこゆる一行見えて秋の日もうすき雲間の初雁の声

秋夕

四 身の上におもひかへして見る秋も^ハうき世の外の夕くれてなく

山月

望 見れは又なくさむ月も浮雲のかゝれるほとや姥捨の山

野月

望 しらぬ世を月にうつしてよそなから見るや野守の鏡なるらん

河月

望 河水に影もとゝめす逝者^{ユクモノ}はさらてもかくそ有明の月

江月

望 見すや人風にひかれて乱葭のよるは玉江の月もある世を

浦月

望 あかなくにく夜か月もみくまのゝ浦のはまゆふ秋をかさねて

籬菊

吾 白菊の咲もふかさぬ心もてあるしまかきも人のとへかし

擣衣

五 征人は夢にたに見しから衣いかにかへして独うつ夜も

曉霧

五 立わたる霧にこもりて明ぬ夜の偽しるき嶋の羽かき

岡紅葉

五 萩かりし賤か心もかの岡の紅葉の色にさすかそむらん

瀧紅葉

五 瀧つ瀬に見し白玉も世を秋の梢の色のなみたにやみる

九月尽

五 今夜とはいかにかきりてしたふらんうき身はなれぬ秋の日数を

初冬

五 松の色そやゝあらはるゝ大かたの梢まはらに冬やきぬらん

時雨

五 はれてむかひくも^モれは消てうこきなき心も^メさためぬ村時雨哉

落葉

五 なをさりにおしとやは見ん青葉よりなれし梢の風のわかれを

朝霜

五 民のやのあさけのけふりたつほともそこと見せたる霜の村消

寒草

五 霜雪のふるさとなから枯果し人めやおもふ庭の冬哉

千鳥

六 あるは世に信すくなき友千鳥なれもや須磨のうらみてはなく

水鳥

六 寒る夜は友ねのをしにおほひ羽もならふか君か袖の心に

氷初結

六 はかなしや氷とけさは結ひても猶とけやすき水のあは緒は

冬月